

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2024年 10月 28日	
所属部局・学年	野生動物研究センター
氏名	島 遼

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
京都大学野生動物研究センター・熊本サルクチュアリ
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
動物福祉実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
2024年 10月 15日 ~ 2024年 10月 18日 (4日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学野生動物研究センター・熊本サルクチュアリ
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
今回の実習では熊本サルクチュアリに訪問し、チンパンジー(<i>Pan troglodytes</i>)・ボノボ(<i>Pan paniscus</i>)・ハシブトガラス(<i>Corvus macrorhynchos</i>)の生態を学ぶとともに動物福祉の実践として採食エンリッチメントや空間エンリッチメントを行った。
10/15 熊本サルクチュアリに到着後、飼育されているチンパンジーとボノボの観察を行った。熊本サルクチュアリは通常毎日決まった人間しか訪れないため、私たち新参者がケージの前に現れると、チンパンジーたちが興味を持って近くまで寄ってきたりモノを投げたりしてきた。最初は見分けがつかなかったが、観察するうちにチンパンジーの顔はかなり個体差があることが分かった(逆に、顔以外では見分けにくい)。チンパンジーは指や耳は人に似ているが、上半身が大きく筋肉質であり、樹上生活に適した体つきをしているのだと分かった。
また、1つのケージに複数のチンパンジーが暮らしており、パントフートと呼ばれる、口を尖らせて空気を含んだ音で長く鳴くコミュニケーションが見られた。この音声は長距離でも届き、鳴き交わして互いに呼びかけ合うときや自分の存在をアピールするときに用いられるという。また、短く太く「ウウツ」と鳴く声も聞くことができた。これは挨拶の音声のパントグラント(上位の存在への挨拶)であると考えられる。チンパンジーには群れ社会があり、音声によって群内の上下関係を維持していることを知った。また、別の飼育場では自分の糞を食べているチンパンジーがいたが、これは過去に狭いケージに閉じ込められていたことから生じた常同行動であり、辞めさせるのは非常に難しいという。これを聞いて、飼育環境が動物の行動に大きく影響を与えることを強く感じた。
続いてボノボの観察を行った。ボノボはチンパンジーよりも小柄で高い声でよく鳴いており、思わず耳を塞いでしまうほどの音量だった。群れではメスの方が強く、ケージの中の唯一のメスであるルイース(52歳)は飼育員と子どもたちのボノボたちの交流を諫めたり見守ったりしていた。また、ボノボたちは飼育を行う平田先生をととても信頼しており、目を合わせてウンウンと頷く挨拶や、遊びに誘うように枝を差し出す様子が見られた。チンパンジーと比べて意思の疎通が図りやすいように思えたが、ボノボも非常に力が強く引っ張られたり噛まれたりすると大怪我をすると教わり、人間とはパワーも素早さも異なる動物との関わりは十分に注意する必要があると感じた。特に類人猿はケージから手を出すことができるので、慣れていないうちはケージの側を歩かないように心がけるべきである。

図1. ケージ外に枝を差し出すボノボ

10/16

まずチンパンジーの朝の給餌を見学した。雌雄が混ざった群れはメスに妊娠管理のためのピルを飲ませるのだが、個体によってジュースに混ぜたりバナナに埋め込んだりと工夫していた。チンパンジーは1人ずつ食事を取るため、別々の部屋に分けてさつまいも・にんじん・柿・ピーマン・キャベツ・ペレットなどを与えていた。個体によって皮を剥いたり剥かなかったりするが、食べる順番は甘いもの・好きなものから食べているようだった。その後採食エンリッチメントの一環としてみかんやピーマンを飼育場に隠した。空間の広がりやチンパンジーの視点を考えながら食べ物を隠すのはとても面白く、時間をかけて食事できるよう見つかりにくい場所を探した。チンパンジーは野菜や果物は汁だけを吸ってしがみカス(wadge)は捨てており、これは繊維質だけでお腹がいっぱいにならないようにしていると知った。



図2. チンパンジーの食事の一例(左)・ピーマンの汁を吸うチンパンジー

続いて空間エンリッチメントとして、消防ホースでポノボのハンモックを作成した。硬いホースを編むのは難しく、工夫して日々エンリッチメントの道具を作成している飼育員の方々に尊敬した。ポノボが安全に使うため、弱い部分や緩みのないようにハンモックを作成し最後は人間が使って強度を確認した。ハンモックの設置場所はかなり高く、足がすくむほどで、改めてポノボの身体能力の高さを感じた。また、午後にカラス小屋のエンリッチメントも行った。ものを隠す習性や引っ張ることが好きな習性を利用して、引っ張り型のフィーダーともものを隠す用の竹筒を作成した。すぐに利用する様子は見られなかったが、好奇心旺盛な若鳥たちがどのように作成物を使うのか楽しみである。

10/17

朝の給餌時間中にオスのチンパンジー・ジャンバが暴れていた。オスのチンパンジーは強さを示すために突然激しく暴れることがあるが、数分で落ち着くそうだ。ジャンバもすぐに何事もなかったように落ち着いたが、巻き添えになったハツカ(メス・最下位)は慰めてもらおうと平田先生の近くに寄ってきており(野生でも他の個体に慰めてもらおうとする)、チンパンジーの群れの特性が観察できて面白かった。その後メスのチンパンジーの健康診断を見学した。健康診断は3年に1度行われ、麻酔してX線撮影や心電図、採血、血圧測定などを行い、メスは人間用の器具で経膈エコーも行っていた。麻酔開始からの経過時間を記録して追加麻酔を打ったり、素早く測定しながらチンパンジーの体調を気にかけてたりと、人間とチンパンジー双方にとって安全に健康診断を行う様子が見られた。緊張感のある現場だった。

午後はカラス小屋に滑り台(カラスは屋根で遊ぶことが好きなことから)を設置し、小屋の土も追加してならした。大掛かりな作業となったためメンバー同士で協力して体を動かした。



図3. ポノボ用ハンモック(左)・カラス用滑り台の板と実習メンバー(右)

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

[その他]

実習時間外は食事の準備など実習メンバーで過ごし、共同生活のスキルを上げることができた。特に焼き芋やBBQなど課外活動を通して学年内の仲も深まったと思う。さらに私は海獣班の学生としてスナメリの観察も行った。港で1時間ほど観察を行ったが、3頭ほどの集団が噴気を上げて泳いでいたり、横になって胸びれを海上に出したりする様子を観察できた。海鳥が盛んに集まっているところにスナメリもよく現れたことから、港内で採餌していたと考えられる。



図 4. 港でのスナメリ観察

[まとめ]

この実習を通して対象動物の観察～実際にエンリッチメントを行う場面に関わることができ、現場の飼育員さんが行うことや考えることが膨大だと感じた。特にエンリッチメントにおける安全性の重要さや消防ホースの万能さを知った。熊本サンクチュアリは名称に保護区という意味があることから動物福祉に力を入れていることが伺えたが、他の動物園・水族館を考えると不完全と感じる部分が多く、動物福祉の取り組みや考え方を広めていく必要があると改めて感じた。また、チンパンジーやボノボにおいて群れ飼育によって様々な行動(音声コミュニケーションやディスプレイ)が見られたことが印象に残った。また、先生方から行動の説明も聞いたことでより一層動物への興味が深まった。霊長類本来の生態に合わせた群れ展示の良さを知るとともに、動物飼育展示施設において解説員や研究員を展示の現場に導入すると、より教育施設としての効果が高まるのではないかと感じた。

※メンター（PWS プログラム指導教員）が確認済の報告書を【report@pws.wrc.kyoto-u.ac.jp】宛にご提出ください。

6. その他（特記事項など）

実習を指導してくださった平田先生、野生動物撮影について興味深いお話を聞かせてくださった中村美穂さま、熊本サンクチュアリの皆様、ならびにPWS プログラムスタッフの皆様にお礼申し上げます。大変お世話になりました、ありがとうございました。